『経営と教育』1972年12月（中央鉄道学園）

未 来 の 教 育

能力開発工学センター所　長
矢　口　　新

未来とは何か

人間の営みはいつも過去を受けて、未来を描いて、現在の仕事として成り立っている。過去が強い力をもっているときは、未来を描くことがないままに現在が成り立つように見える。しかし、その時でも未来が描かれていないのでなく、過去の延長上に未来が考えられているのである。役人が予算を立てるときは大体そういう形である。前年より何%ましと機械的に数字をつくっていく。これで発展があればよいが、そうでないと過去の惰性に流されるままで怠慢だということになる。いわゆるマンネリズムになったという。同じことのくり返しをやっていると人間はいやになり、情熱を失って個人的にも社会的にもたるんでしまうものらしい。そういうときは未来が探し求められる。過去の力の強い現在を打ち破ろうとする意欲をもつのであろう。それが未来を求めるのである。未来を語る力は、常に現在の問題が生み出すといってよい。

未来の教育を語るとき、ここ数年来は、教育の技術についての未来が語られるのが常であった。ここで教育というとき、主として経営体の中の教育についてのことにするが、技術の革新が、人間の間のコミュニケーションの仕方に変化を与えつつあることから、教育の世界にも影響を及ぼしたと考えられる。特に企業では能率ということが重視されるから、そういう観点から新たな機器の採用ということが考えられたのである。

しかし、最近は多少変わってきて、創造性開発の技法などということが問題になっている。ところで、企業界で一般の学校教育と異なった言い方をされる言葉に技法という言葉がある。この技法が次から次へと流行するのは、企業の教育界における特色といってもよい。それはちょうどアメリカの経営学が十数年来次々へと紹介されて、応接にいとまなかったのと同じ現象であった。その傾向はまだ多少残っていて、やれ創造工学だの、センシティビティ・トレーニングだの、ＫＪ法だのと次々へと技法が採用された。企業の教育界の人たちの食欲もなかなか旺盛である。それはさておき、創造性開発の技法などというのが採用されて、教育の姿は変わるのであろうか。いまのところ、そんな気配はなさそうである。教育の科目の一つにそういうものがあるという形である。このへんに、実はなかなか重要な問題がひそんでいるようである。率直に言うと、企業の世界では人間の教育について、あるいは、更に根本的には人間についての理解が誤っているのではないかという気がする。未来の教育を語るには、そのへんから問題にしなければならぬのではないか。

人間像と教育の体質

まだなまなましい印象なので、事例としてとりあげてみたいのであるが、このたびの田中総理の中国訪問に際して、北京の事情がテレビを通じてわれわれの前に紹介されたが、その中に、北京大学の日本語学科の学生とインタビューした場面が

あった。その中の学生は、労働者の中から選ばれて大学にはいった人たちであろうが、いかにも素朴で愛すべき学生とうつった。どういう職業にしろ、人民のために奉仕したいと思うというような言い方、日中友交のために尽くしたいという言い方も素直で好感のもてる人間像であった。人々は、おそらく日本の学生とは非常に異なった人間像であると感じたのではなかったか。こういう人間像は決して技法によってつくられるものではなく、教育そのものの体質の問題である。あるいは、更に根本的にはその社会のもっている教育力がつくりあげるのであって、その意味では社会の体質なのである。企業における教育の体質も基本的には社会の体質からつくられている。

そこで少し過去にさかのぼって考察してみると、現代のような教育がわが国に出現したのは明治以来であって、それ以前とは全く異なった教育になったのである。長い江戸時代という封建の社会の教育は、基本的には人間の関係の維持に中心をおいた教育であった。そういう教育は現代のような知に中心をおいたものでなく、生活そのものの中で行為に重きをおいて人間の心を育てる教育であった。心というのは、行動の習性に対して名づけられた言葉といってよいが、明治以前の教育は、封建の社会を維持するためにも一定の人間関係を維持する行動の習性―心をつくることが主となったのである。

明治の社会は、それを打破して新たな近代国家をつくらなければならなかった。後進国として出発した当時の日本の指導者の眼に、何よりたいせつなものとうつったのは近代的知識であった。文明開化というスローガンがよくそれを物語る。そして、開化した人間がやることは殖産興業であった。こうして国民大衆の啓蒙のために、教育には大変なエネルギーが注がれた。その教育はだから一にも二にも知識であった。しかも啓蒙すればよいのであるから、とにかく知ればよい、そうだと思えばよい、というムードである。かくて以来百年にわたる知識注入教育がはじまる。

これは一応見事に成功した。国家もその限りで発展した。追いつけ追い越せと考えて、今や先進国を追いこすに至ったとさえ考えるほど自信ももっている。その間に教育についての観念も定着して、教育といえば知識注入以外には考えられないほど固定した観念ができている。現在多くの人が教育という言葉を聞けば人を集めて講義をする、教科書を与えるということ以外頭に浮かばないといってよい。

明治以来現在に至る百年間、教育の世界で考えられた人間像は知識をもてる人である。その知識をもてる人というのも、全般的な国民の層でとらえれば、啓蒙的知識である。

しかし、その結果の人間が現在必ずしもよい社会をつくっていないことは最近漸く自覚されつつある。教育に反省が求められている。

教育転換の基本

人間不在ということが至るところに使われるようになった。教育さえもが人間不在の教育といわれるようになっている。人間のやっていることに人間不在ということが言われるのは奇妙なことだが、これはやはり人間の行動の習性としてつくられたものである。やはり近代社会の体質、教育体質がそのようにおのれ自身が仕事をし、社会をつくっていく場合に、人間のことを忘れるという行動の仕方をする人間をつくりあげたのであろう。いつの時代、いつの社会でもその社会が固定してくると、そのために人間を忘れてしまうのである。また、固定させるために人間を忘れることもある。近代日本は、文明開化と殖産興業に浮身をやつして人間を全体として育てることを忘れた。それでも明治時代はそれ以前のものが残っていたからよかったが、一世紀たっていまや全く三代目になった。人間を忘れた人間が多くなりすぎた。人心の

荒廃といわれる所以はそこにある。未来の教育を語るには、ここが出発点でなければならない。

実は創造性が求められ、根性を育てることが要請され、あるいは教育技術の革新が求められるのも、根本的には現在以後の教育が、過去の延長上に成り立つものではないことの漠然たる認識なのであろう。それを人々はまだ明確に自覚するに至っていない。手さぐりしているのである。依然として過去の教育のわくの中で考えて、一つの新しい技法としか考えない。技法と受けとられるときには、それはもう過去の教育の体質の中でとらえられている。実はそのようなある一つの技法でなく、教育の全体構造が転換しなければならぬのである。そのことに気づかないのが現在なのである。

現在の教育を転換せしめる基本的なものを、私は「行動による行動の教育」と考えたらよいと思う。新しい教育の方向を求めている人々の究極のものはそこに位置づくと思う。それは百年の過去を背負った現在から未来への展望としても正しいと思われる。知識というものに偏向して人間を見て、それを通じてあらゆる人間のもたねばならぬものが育てられると考えたところに大きな誤りがあった。いまやそういう患考しかできない教育者が多いが、人間のモラルというものがどうして一片の紙きれで育てられたり、講義や説話で育てられることが可能であろうか。順法などというが、そういう行動がどうして現在のような知識注入式の教育で育てられようか。人間的なるものがどうして言葉だけによって育てられようか。就業の規則を守るという行動がどうして一片の言葉による教育で育てられようか。そういうものが人間の全行動、全生活から離れて、紙にかかれたり、口の端にのぼらせられたりする形で取り扱われるということに、人間の全人間的行動が何であるかが忘れられているのである。いまわれわれが考えている教育の内容というのが、すべて人間の外側にあってそれを与えるという形で教育が考えられているが、これこそ近代教育の生み出した大きなあやまちであった。それらあらゆるものは人間の中にあるものではないか。人間の行動として外に表わすものではないか。それらは他人と自分とがいる社会で、人々がいるその中で、一人一人によって全人格的に表現されるものではないか。そういう具体的な場における行動として出るものを育てるのであって、人間自体を育てるということはそういうことなのである。それは知識というものを与えて、それによって知ったとおりに、わかったとおりに行動せよということとは違うのである。近代教育はまさにそう考えてきたが、それこそ人間に対する無理解であった。実は知識というものも、われわれが従来やってきた教育では人間のものにならない。人間の行動としての知とはならない。だから忘れるか、死物としての知である。大部分は忘れるであろう。

企業の教育の指導者たちが、この本質的なことに気づかなければ、教育に未来はないであろう。依然として現在の教育が続くというだけのことである。

生活の中での人間教育

一時、OJT ということが盛んに言われたが、結局あまり定着しないままで低迷している。現代人にはそういうセンスがないのである。つまり教育というと、人が人に対して説き教えるという形しか考えられない。人を教室に集めて講義する式の教育の考え方である。しかし、その場合でも本当に学んだという事実が生まれるのは、教えられる側が積極的にその講義に取り組むときなのである。教育は本来学習する側のことである。そう考えるところに OJT が生まれているのである。仕事に本気になって取り組むとき、仕事が人間を育てる。つまり行動が人間を育てる。しかも全人間的に育てる。仕事に本気になって取り組むように人間の配置が考えられるところに教育を管理するものの

仕事がある。キャリヤープログラミングということが考えられるのは、そういうところにある。このように考えるのは、全体存在としての人間の立場であって、先輩が後輩をよき人間として育て、社会の伝統と発展を人類的立場で考えるからである。そういう行動が正しい教育を成立させるのである。もしそうでない立場、たとえば、人間を企業の中に使う機械の一分子として考えるような人間観があれば、機械的に人間を動かしていくであろう。それは企業を破壊に導くことになろう。OJTというのはそう考えると教育の構造的転換がなければ成立しないし、教育の哲学の転換の問題になる。根本的な問題なのである。

職場というのは、単なる機械的な分子的人間の集まりでない。それは生きた人間の全人間的生活の場である。近代企業は、労働を人間から分離して買いとる形態をとってきたので、長い間に人間の全人間的存在性を見失っている傾向にある。人間の存在であるところには人倫的関係が存在するのは当然で、その集団の中で人間として育てられていくのである。そこにもまた OJT があるのであって、今はそういうものが教育の重要な問題として考えられていない。それどころか、そういうものを教育から排除しようとみんなで努力している。ゆがんだ教育観というべきであるが、それこそ人間不在というべきであろう。そういう考え方になってきたのも、明治以来の近代教育がつくった人間のせいであろうか。

OFF JTというのは、いわゆる集合教育であるが、それは本来生活の中から生まれて来るべきものであるが、近代教育では逆なのである。知識として分割してしまったのである。だから、上に述べた OJT のような考え方を土台にしてつくり直されなければならない。OFF JT もまた行動による行動の教育となるべきであろう。その基本的精神は、教育の場としてつくられた場所も、本来生活のシミュレーションの場としての意味をもつということである。最近さまざまな教育技法として紹介されているものは、実はそういう地盤から考えられたものが多いのであるが、多くは誤解され歪曲されている。

新しい体質の教育を求めて世界が努力をしているが、現在最も基本的な方向を打ち出しうると考えられるのは、いわゆるプログラム学習方式である。その具体的な営みは、すでに教科書の形態を変化させ、視聴覚教材の形態の転換を暗示し、いわゆるティーチングマシンといわれる教育の機器を生み出し、コンピューターの学習における利用を可能ならしめつつある。これらはすべて教育を生活のシミュレーションとして、行動主義による教育を土台にしているのである。

知識にかわって、行動が教育の場の中心にすわってプログラムされるとき、さまざまの技法も正しく位置づき、未来が出現するであろう。